

「明人抗倭図巻」を解読する——「倭寇図巻」との関連をかねて

朱 敏

はじめに

二〇一〇年七月に、日本の東京大学史料編纂所に中国国家博物館所蔵の「明人抗倭図巻」とモチーフ、構造様式がよく似ている「倭寇図巻」が所蔵されているとのニュースを聞いた。所蔵者の変遷が全く不明な絵にこれほど似ている二つのバージョンがあるとは、後世に伝わる絵としても珍しい。この点で中日両国の研究者に注目されたのである。小文では「明人抗倭図巻」の作成と内容について検討し、さらに「倭寇図巻」との関連にふれ、二者の相互関係について推論をしたい。

一、「明人抗倭図巻」

「明人抗倭図巻」、材質は絹、彩色による絵画で、縦は三二・〇cm、横は五七・〇cm。中国国家博物館蔵。藏品番号・Y一九六四。題箋なし、一九六五年に所蔵となった。

画面の内容は順番で次の四部分に分けられる。倭寇の襲来、人々の避難、水上の合戦、勝報の伝達と捕虜の献上である。

画面を広げると、広い海に遠くから多くの船が押し寄せてきたのが見える。船には白生地に赤く縁取られた旗がかかり、倭寇がいっぱい乗っている。遠くの船は帆を高くあげて、スピードを上げて陸に向かってくる。近くには三隻の船がすでに帆を降ろしており、一隻の船にいる二人の倭寇は両手で櫂を漕ぎ、上陸しようとしている。ほかの二隻は錨を下

ろして停泊している。船上の倭寇はおしゃべりをしたり、弓を拾ったり、刀を振り回したりして、あたかも待ちきれないかのようだ。一番先にある船の船先に倭寇のグループが集まっている。そのうちの一人は扇子を手に取り、声高に何かを読み上げている様子である。ほかの者は腕を組んでいる。岸边では、倭寇が小グループになっており、二人の倭寇は道沿いの岩に乗り、一人の倭寇の肩にもう一人の倭寇が立ち、長槍を支えに形勢を眺めている。ほかに刀を手にした倭寇たちがたむろし、弓を引いている者もいて、忙しそうに前方の村に向かっていく。

田舎の道に沿って、先に上陸した略奪者はすでに分捕り品を手に入れた様子で、倭寇たちが袋や宝箱をかつき、船に戻っていつている。中には生糸やシルク、あるいは骨董と書画、または薬や絨毯が入っているかもしれない。⁽¹⁾しゃがんでいる姿と重たそうな歩みから略奪の残酷さが分かる。近くの村では屋敷が燃え上がっている。四人の倭寇は各々刀を持ち、何かを話しているようだ。一人の倭寇は弓を引いてなにかを狙っている。倭寇の前には群れて避難する人々がいる。年寄り、女性、子供たちが残りの家財を背負ったり、担いだりして前方へ走っている。水路からと陸路からの避難があり、略奪を免れた二羽の鶏がびっくりして、鳴きながら逃げていく。倭寇から離れた坂では、避難の人々は地面に座り、釜を立ててご飯を作る人や、おしゃべりする人いろいろである。赤ちゃんは母親の腕の中で熟睡し、幼児は食べ物をねだっている。人々の顔に恐怖と疲労が満ちている。

疲労した群れの後に、岩の間に旗が林立し、刀と槍の傍らに、待ち伏せの明軍が突然現れた。盾を手にし、鎧を身につけ、「火照奇兵右伏」、「設伏猛烈天兵」、「国」、「靖」、「威武大捷天兵」などの文字が書いてある旗を持つ兵が堂々と進軍している。水上では、双方はすでに白兵戦になっっている。明軍は装備が充足し、船首に火炮(銃)、「火妖」などの火器を置き、船尾には長槍、銃鉞(まぐわ)、「天蓬鏢」などの兵器を置いてある。将校は自ら督戦し、大鼓や銅鑼もたたかれ、兵士たちは勇気凛々である。向かい側の倭寇にはすでに敗退の兆しが見えており、水中に落ちる者、すでに溺れかかっている者などがおり、壊された板、略奪したものが漂っている。倭寇船にある旗には「日本弘治一年」とある。

手に「報」という旗を持ち太鼓橋に駆け上がりとする騎馬武者より、画面は勝利からの帰還を表している。橋の前方にもう一人の「報」を手にした騎馬武者がいる。「勝報がしきりに来る」という意味であろう。航路には明軍の船が二隻、うち一隻にある旗には「報捷第一荷水兵団長」とある。船先には倭寇の首や縛られた倭寇がいる。船にはそれぞれ一人の将校が座っており、嬉しそうに話し合っている。陸も大勝利の様子である。刀や戟をもった兵士は倭寇の捕虜を護送して駐屯地へ向かっている。一人の兵が長槍を担ぎ、片膝たてて將軍に状況の報告をしている。出迎える行列の最前列に「浙直文武官僚」という旗をもつ兵がいて、旗手の両側にいる兵隊が儀式用の斧、瓜をもっている。中央にいる騎馬のものは紗の帽子をかぶり、紅色の官服を身に付けて、穏やかな表情でいる。その後ろには一列になった三人の旗手がいる。一つの旗には「蘇松水陸官兵」とある。そのうしろには多くの騎馬の官僚がいる。そのさらに後ろには刀と槍をもった兵士で、二つの旗にそれぞれ「田州報效狼兵長」、「川広義□□兵」と書かれてある。画面の一番奥は城壁で、その上にたくさんの旗がはためき、一つの旗には鏡文字で「……漳江……重地」

とある。壁のくぼみに兵が一人ずつ立っている。これに続くのは松林と岩で、画面はそこで終わっている。卷子の右の隅に陰文の篆書の方形印鑑が押されており、上のほうは判読不能、下の印文は「遍舟五湖」とあり、所蔵者の印鑑かも知れない。

一四世紀のはじめごろ、日本は南北朝にあたり、諸侯が乱立した。戦に敗れた領主は、武士や商人や浪人を糾合して中国沿海において、密貿易や強奪をはたらき、倭寇と称された。明朝初年には、支配者は海防を重視し、「百余年の間に、海上に大規模な侵犯はなかった。朝廷は数年おきに大臣を一人巡回に派遣するのみであった。嘉靖の中ごろに至り、倭患は初めて現れた⁽²⁾。国の腐敗が進み、海防が弛む一方、朝廷は正常な对外贸易の需要を軽視し、朝廷、民間における海外の正常な貿易関係を正しく取り扱わなかった。最初は一部大臣の「倭患は市舶(交易)より起こる」という提案を受け、福建、浙江と広東に設けられた市舶司を廃止すると同時に、伝統的な海禁政策を踏襲した。これにより、正常な貿易が阻害され、密貿易が助長された。日本本土にいる倭寇と中国商人が結託し、略奪を行った。「庶民の中でも乱れるのが都合がいいと思う者は相次いで海に入り倭寇に従った。兇徒、逃げた囚人、罷免された官吏、ずるい坊主など……志が得られないもの、勢力が伸びないものはみな倭寇のために回し者になり、案内を勤めた」(『倭変事略』)。倭患は、ますますひどくなり、東南沿海地域にあまねく及び、朝廷の存亡も脅かしかねなくなった。

そこで、世宗は東南沿海における軍備と守衛の整頓に着手した。最初は朱統を浙江巡撫に任命し、浙閩における海防軍務を統率させた。朱統は着任した後、渡船の制度を改め、保甲制度を厳密にした。倭寇に通じる者を拿捕し、部隊の整理と兵船の増加を行い、海防を強めた。朱統の

取った措置は効果があつたものの、地方の豪族には不利益をもたらした。このため、朱は結局弾劾を受け、官職を罷免され、逮捕されたうえ北京までおくられそうになった。これを知った朱統は憤り、毒薬を飲み自害した。そのため彼が行った防衛の強化は中断された。「浙江の衛所は四十一、兵船は四百三十九あつたが、すべて老朽化して顧みられることがなかつた」⁽⁵⁾。

嘉靖三二(一五五二)年四月、倭寇は浙江の舟山、象山などより上陸し、台州、温州、寧波と紹興の各地を略奪した。同年五月、倭寇は黄岩県城を陥落させた。情報が入ると、世宗と大臣たちは再び事態の深刻さを認識した。給事中王国禎と御史朱瑞登は都御史制度の復活を提案した。「吏部に、任に堪える者を推挙してもらい、これを直ちに赴任させ、兵を督促して賊を討伐に当たらせよ」と。世宗は命令を下して、巡撫山東右僉都御史王忬⁽⁷⁾を巡視浙江兼福興漳泉の提督軍務大臣に任じ、また浙江と直隸を守衛する参将を各一名増やして、俞大猷と湯克寛をこれに当たらせ、ともに王忬の命令に従うよう命じた。嘉靖三二(一五五二)年閏三月、海賊王直は倭寇と結託して大規模な侵犯を始めた。「兵船は数百もつらなり、海を覆う勢いで来た。南は台、寧、嘉、湖及び蘇松から淮北にいたる沿海の数千里は同時に警戒を報告してきた」⁽⁸⁾。「上海及び南壘、吳淞、乍浦、秦嶋の諸所はみな陥落し、蘇、松、寧、紹の衛所で略奪され、あるいは焼き払われたものは二十を超えた」⁽⁹⁾。王忬は軍隊を督促してこれに應戦し、普陀の大勝利を収めた。しかし、これはかえって倭寇の警戒を起こさせ、倭寇の活動を大規模行動から分散した騷擾にさせた。結局王忬は倭寇の侵犯を有効に阻止できなかつたため、大同巡撫に左遷された。李天寵が代わりに浙江巡撫になった。この後、温州、台州、寧波、紹興などは倭寇の突如の襲来に悩まされた。

嘉靖三三(一五五四)年五月、給事中王国禎、賀涇と御史温景葵の

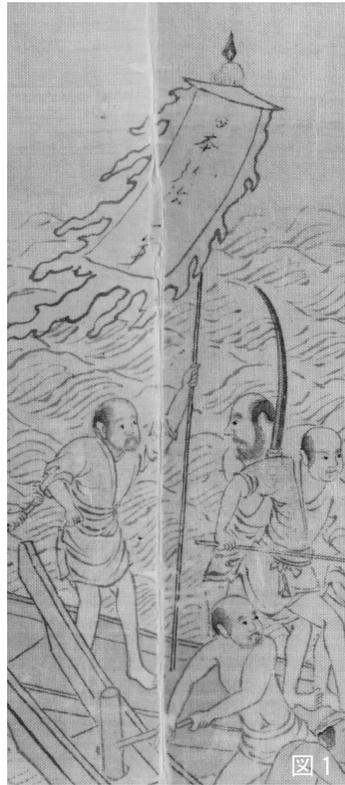
提案を受け入れて、皇帝は、南京兵部尚書張経⁽¹⁰⁾に都察院右副都御史の身分で、南直隸、浙江、山東、両広、福建などの軍務を統率しよう命じた。張経には「すべての軍事をその便宜処分に従い、戦で命令を聞かないものは、都指揮以下の武官と五品以下の文官は軍法を持って処罰できるよう許可す」⁽¹¹⁾の権限を与えた。張経は倭寇について早くから認識し、前に地方官の職責、軍備の増強、兵士の人数などについて「各所の巡撫は厳しく所属を督促し、兵船をあらかじめ集める。兵士を追加募集し、軍隊の充実を実現する。長年の積み立て銀を精算し、兵船の建造に用いる」⁽¹²⁾ことを提案した。さらに着任してから、六つの措置を取った。一、倭寇に対応する過去の行政を検査し、復活させる。二、海上戦用の兵船を集める。三、現地の兵を再編成する。四、海防戦守の設立を提案する。五、遊撃兵を設置して防護に用いる。六、賞罰の条規を明言する⁽¹³⁾。これ以降、これまで受身的な単独作戦になっていた倭寇に対する闘争は、積極的な協同作戦となり、賞罰も明確に行われ、ターニング時期に入った。

その後、胡宗憲、俞大猷、戚繼光などの將軍の努力によって、最終的に倭寇を殲滅することができた。

「明人抗倭図巻」を見ると、これは明軍の倭寇に対する勝利を描いたものであると分かりやすい。しかし、絵巻には作者名も、題跋もないうえ、関連の文献記録もなく、変遷のプロセスも詳細でないことから、画面の内容が、具体的にはどの勝利であるかは不明である。戦のあった時間、場所、結末と、誰が何のために製作したかについては更なる研究が必要である。幸い「明人抗倭図巻」の画面に描かれた旗には一部文字がある。現在判読できるものは一七箇所あり、そのうち「日本弘治一年」、「浙直文武官僚」、「蘇松水陸官兵」、「田州報効狼兵長」、「靖」などは具

体的な時間や場所を示している。ここではこれらの直接的な情報を歴史文献に照らし合わせて、文献の解説をすすめ、パズルから完全な歴史的画面を復元しようとするものである。

明軍と倭寇の合戦場面では倭寇船に墨書きの「日本弘治一年」がある(図1)。これは図巻の内容考証のために直観的な根拠を提供した。



「日本弘治一年」はすなわち明嘉靖三十四年、紀元一五五五年である。この時期に平民軍事専門家である鄭若曾⁽¹⁴⁾は自ら倭寇との戦いに参加し、倭寇に抵抗するための作戦を献じ、大量の関連史料を収集し、沿海の地図を編纂したうえ、「日本図纂」、「籌海図編」、「江南経略」、「万里海防図論」、「江防図説」などの関連書籍を書き上げた。「籌海図編」には次の表1「嘉靖三十四年倭夷入寇年表」⁽¹⁵⁾のように、詳細に当時の倭寇による騒擾と明軍の反撃が記述されている。

図表の統計によると、倭寇の侵犯地域は福建の鎮東衛、浙江の温州・台州・寧波・紹興・杭州・嘉興、江蘇の蘇州・松江・常熟・鎮江・揚州に及んだ。嘉興・蘇州・余姚県は度々騒擾を受け、最も被害を受けた。馮賢亮は『明実録』の記載により倭寇の入侵状況に基づいて数字を統計

表1 嘉靖三十四年倭夷入寇年表

	慧潮	漳泉	興福	温台	寧紹	杭嘉	蘇松	常鎮	淮揚
正月						徐海が柘林より乍浦の衛所を攻める。海寧に侵犯し、平湖県を攻め、崇徳県を陥落させた。すぐ湖州府へ行き、歸安県と徳清県を攻める。	老鶴嘴にいる賊は逃げて、柘林の賊と合流した。賊は南彙所を攻めた。僉事董邦政が川沙津の倭寇の拠点に攻め入り、これを大破した。賊は金山衛を攻めた。総兵俞大猷、副使任環、孫安猷が浙直官兵を率いて勝教で賊を破った。賊は崇明県に入り、沙者の民兵はこれを大敗させた。		
二月						賊は嘉興府を攻めた。	賊は青邨所を攻めた。指揮翁時燮などがこれを下した。		
三月							賊は上海県に籠城した。賊は金山衛を攻め、総兵俞大猷はこれを撃破した。副使任環は野茅洪で賊を下した。		
四月				賊は瑞安県を侵した。	賊は紹興府を侵した。慈溪県を侵犯した。賊は余姚県を攻めた。	賊は乍浦所を攻め、ただちに嘉興府に至った。総督都御史張経と巡按御史胡宗憲は兵を併せて王江涇で大敗させ、斬首は三千余に及んだ。	賊は常熟県を攻めた。副使任環は三丈浦の賊を大破した。賊は崇明県を攻めた。柘林の賊首徐海は手分けして蘇州、常熟、崇明を略奪した。	賊は無錫県を攻めた。	賊は通州を侵した。賊は海門県を攻め、知事趙卿はこれを撃破した。賊は揚州府を侵した。

五月				賊は爵谿所を攻めた。	賊は余姚県を侵した。賊は三山所を攻め、指揮劉朝恩がこれを破った。	賊犯平湖県。指揮李希賢がこれを下した。賊は乍浦所を攻めた。	賊は呉江県を侵し、巡按御史周如斗がこれを破った。任環が陸涇壩で賊を下し、また三丈浦の賊を攻め、これを大敗させた。賊は再び柘林を根拠地とした。		参将喬基などは呂四場で賊を襲撃し、これを大敗させた。
六月					賊はまた余姚県を侵し、郷兵に撃破された。賊は観海衛から遁走した。都司王霈などがこれを追い、霍山洋で下した。参将盧鏡は馬鞍山新林で賊を下し、また勝山亀整洋で追撃した。	賊は杭州府を侵した。賊は平望から再び嘉興府にもどり、嘉善の王店を経由し、推官劉泉復がこれを大敗させた。	賊は杭州から逃げ帰り、呉江の平望を出る。巡按御史胡宗憲、副使任環などが浙直の官兵を合わせてこれを追撃し大敗させた。賊は松江府を侵した。賊は蘇州府を攻めた。常熟三丈浦の賊は海上に遁走した。太倉の知州熊桴は賊を登州沙まで追撃した。副使任環、総兵俞大猷は賊を馬蹟山で下した。	副使王崇古が靖江で賊を下した。	
七月							知府方廉が経略を用い、柘林の根拠地に毒を入れ、賊の死者千余人に達した。浙江提督胡宗憲は参将盧鏡、都司王沛を遣わし金山洋で賊を下した。柘林の賊は根拠地を陶宅に変えた。劇賊五十三人が蘇州を侵し、提督都御史曹邦輔がこれを平定した。		
八月					副史孫宏猷、参将盧鏡は大陳山で賊を攻め、下した。賊首の林碧川が捕らえられ、沈南山で処刑された。		七丫港、呉淞江の賊は海上に遁走した。把総揚尚英がこれを追撃し、下した。総督侍郎楊宜が游撃將軍曹克新、副使任環を遣わし、川沙の賊巢を攻め、これを追い払った。賊は上海県を侵した。		
九月					賊は舟山の謝浦を根拠地とした。				
十月				賊は寧海県を侵し、提督都御史胡宗憲は翁山で討ち、全滅させた。	賊は余姚県を侵し、参将盧鏡は梁衛で賊を下した。	賊は海塩県を侵し、知県鄭茂、指揮徐行健がこれを平定した。			
十一月		賊鎮東衛を侵した。官兵は東岳山で下した。							
閏十一月				賊は平陽三港を侵し、直平陽壘に至った。	賊は嵯県を侵し、官兵はこれを平定した。		賊は周浦に駐屯し、四川僉事焦希程が土兵を率いてこれを下した。賊は海上に逃げ、総兵俞大猷、副使王崇古は呉淞江口まで追撃した。		
十二月				副使譚綸などが清風嶺で南鹿山の賊を追撃し、これを平定した。					

した。洪熙から正徳年間まで、記載された大規模の倭寇侵入に関する記録は一〇回に及ばないが、嘉靖年間の倭寇騷擾は一七九回にのぼった。⁽¹⁶⁾嘉靖三四年だけで、倭寇の騷擾は三七を数えた。年初の正月から年末の十二月まで毎月、記録されているところから、倭寇が猛り狂ったさまがうかがえる。表1を見ると、この年から明軍が積極的に倭寇と戦い始め、局部的な勝利を取めた。

絵巻の最後部分に、凱旋して帰還してきた部隊を迎える行列に、二つの旗があった。それぞれに「浙直文武官僚」と「蘇松水陸官兵」と書いてある。これは戦の場所の判定に役立つものである。

「浙」は浙江を指し、明代の行政省である。この沿海府は温州府、台州府、寧波府、紹興府、杭州府、嘉興府である。

「直」は直隸を指し、今の江蘇省である。明永楽年間に成祖朱棣が南京から北京へ遷都し、南京は陪都となり、南方における政治・経済・文化の中心となった。この沿海府には松江府、蘇州府、常州府、鎮江府、揚州府と淮安府がある。

「蘇」は蘇州府を指し、七県を管轄する。それぞれ長州、呉江、崑山、常熟、嘉定、太倉、崇明である。

「松」は松江府を指し、華亭、上海と青浦の三県を管轄する。

明代の浙直兵防の官制では、倭寇に対する闘争の必要から、主要な責任者は総督で、浙、直、福の軍務を総括し、巡撫浙江都御史を兼ね、浙江に駐在した。最初の総督は朱執で、次は王忬であった。嘉靖三三(一五五四)年に、総督は巡撫と別々に設置され、張経は都察院右副都御史の身分で南直隸、浙江、山東、両広、福建などの軍務総督となった。李天寵は浙江巡撫に任命された。同時に、胡宗憲を浙江巡按監察御史にして、監察と功績の記録を担当させた。三四年に、特別の勅旨により、趙文華を督查直浙軍務侍郎に登用した。このほかに、食糧などを担当す

る巡視海道副使と、各府の守備を担当する兵備副使、參將と把総もあつた。それで、「日本弘治一年」における「浙直文武官僚」とは、上記の者たちを指すであろう。兵制の規定により、総督、巡撫は浙江に駐在したから、戦のあつた場所は浙江であると推定したい。江蘇、浙江は自然に恵まれ、物産も豊かであることから、蘇州、杭州、嘉興などの地域は倭寇の主な侵犯先になっていた。

直隸兵防の官制では、蘇・松府の守備のために參將を設け、主に該當府の軍務を担当した。出迎えの行列に「蘇松水陸官兵」とみえるのはこれらの官軍ではなく、蘇松海防同知が率いた軍隊を指すものと思われる。この官職は、張経が着任してから海上用の兵船を集めること、また海防担当の職を設けることを上奏し、世宗が設置を許可したものである。設置の背景には、当時倭寇の襲来に際しては、船は必ず海から来る、それも必ず浙東より来るのに、明軍の兵船は数もかざられ、兵力も欠乏していた、ということがあつた。「吳淞江口と黄浦のあたりはすべて海に通ずる要路であり、兵船が既に置かれたが、統率する人がない。蘇、松に海防同知一人を増設するを請う」⁽¹⁷⁾。張経は「浙の東と西、江の南と北の把総が所轄する兵船を一つに合わせて、把総はそれぞれ半分の兵力を遊兵にし、半分を守兵にする」⁽¹⁸⁾、倭寇が守備地域に侵犯してきた場合は全力でこれと戦うべきで、他所を侵犯した場合は守兵を守備に残して、遊兵を追撃に使うことにした。これにより、江・浙の兵が互いに協調し、呼応し合うこととなり、兵力の集中と指揮の円滑化ははかられ、江浙の沿海による共同防衛が実現した。

絵巻にはほかに二つの旗がある。「靖」と「田州報效狼兵長」(図2)と書かれている。これは他地域の兵隊(客兵という)が参戦していることを表している。



このうち、「靖」は「保靖兵」を指す。明初に保靖宣慰司を設け、湖広都指揮使司に所属され、毎年表を奉し、朝貢した。嘉靖三三年の冬、朝廷は「倭寇を協同で殲滅する」ために、永順と、保靖の兵を徴発した。⁽¹⁹⁾三四年には、永順宣慰である彭翼南と支仕宣慰の彭明輔が兵五〇〇〇人、保靖宣慰の彭宸臣が兵三〇〇〇人を率いて浙江に入り、抗倭に参加した。『明史』「保靖州軍民宣慰使司」の記載によると、保靖兵は石塘湾で倭と遭遇し、大戦の結果これを下した。賊は北の平望へ逃げて、諸軍がこれを王江涇に追撃し、これを大破した。⁽²⁰⁾この「王江涇に追撃し、これを大破した」というのは、「張」経が参将盧鐘を保靖兵の督促に、「(愈)大猷を永順兵の督促に遣わし、(湯)克寛に水師を引率させて中路から追撃し、王江涇で合戦した」事を指す。戦のあと、彭宸臣は昭毅將軍に封じられた。画面にあったように、保靖兵と「威武大捷天兵」の正規軍が共に倭寇を追撃し、敵の逃げ道を封じたのも歴史上の記述に合致している。

田州は現在広西にある。明代に田州府を設置され、毎年使節を派遣して表を奉し、馬と地方の特産を朝貢した。⁽²¹⁾現地の狼兵は勇猛で戦いに長け、少ない兵力で多くの兵を負かすことで有名である。中でも田州の岑氏兵が更なる名声を有する。張経は両広の軍務を総督したことがあり、狼兵を抗倭の闘争に徴発することを提案した。嘉靖三四年四月、田州土

官の首領である岑猛の妻で瓦氏夫人なる者は、自らその孫の岑大寿、岑大禄と頭目の鐘南、黄仁を統率し、兵四一〇〇名、軍馬四五〇頭を、帰順州の頭目黄虎仁などは等兵八六三名、南丹州頭目莫昆、英從舜などは兵五五〇名、那地州頭目羅堂などは兵五九〇名、東蘭州頭目岑褐などは兵七五〇名、合わせて六八七二人を率いて出征してきた。蘇州では、総督張経から総兵俞大猷の指揮に従うよう命じられ、金山衛、漕涇鎮、王江涇での戦に参加した。賊を多数殺したことから瓦氏及びその孫である岑大寿、大禄は皇帝から銀貨を恩賞として与えられ、その他は軍門より奨励をするよう命じられた。しかし、張経が陥れられて死去してから、狼兵と湖広の土兵は管轄者がなく、給料もピンはねされたことから強奪を始めた。「十一月、狼・土諸兵の徴発を止めた」。⁽²²⁾瓦氏夫人は狼兵を率いて田州に引きあげ、その後まもなく病死した。

画面にある確実な文字を考えると、文字の間には密接な関連があることに気づく。時間、場所、参戦した部隊という面では同じ戦闘—王江涇の戦いを表している。そのうち、保靖兵と田州兵は客兵として徴発されて倭寇との戦闘に参加したものである。これは嘉靖期の抗倭の特定時期に用いられる軍事政策で、朝廷が当時衛所の兵力不足を補うためにとつた応急策であった。そこで、画面に「田州」、「靖」など客兵を代表する文字が意味を持つのである。田州兵が倭寇と戦いに参加したのは嘉靖三四年の半年しかなかった。というところで、「田州」は時間を明確に定めている。画家が「田州報効狼兵長」と書いたのは、明らかに日本弘治一年」と互いに証明しあって、戦の時間は嘉靖三四年であるといおうとしたものである。加えて画面に現れる明軍の作戦方式と戦術、献上される捕虜の人数の多いことから、描かれたのは「王江涇の大勝利」であると確認できる。

王江涇は嘉興より北二三五キロ離れたところであり、水路は北へ蘇州、松江、常州に通じ、南へは杭州、寧波、金山、紹興、温州に至る。蘇州・杭州地域の有名なシルクの産地である。

嘉靖三十三年、徐海は和泉、薩摩、肥前、肥後、津州、対馬などの倭寇を率いて、柘林（江蘇松江県の南東）に集まり、ここを拠点として、四方を略奪した。三四年正月に、倭寇は平湖、湖州を侵し、乍浦、帰安を攻め、崇徳を陥落させた。二月に、金山、嘉興を攻めた。四月に、倭寇は手分けして蘇州、常熟、崇明、湖州と嘉興を略奪した。崇明、江北を攻めた倭寇は太倉知府熊桴から追撃され、登州沙で全滅した。常熟、無錫を攻めた倭寇は三丈浦に駐屯した。²⁴⁾

五月に、柘林にいる倭寇四〇〇〇余人は突然嘉興を襲った。総督はこれに対して反撃を緻密に計画した。最後の布石である、湖広永順、保靖の土司兵が所定の場所に到着するのを待って、先に参将盧鐘に狼兵、土兵を督促して水陸から襲撃し、保靖宣慰使彭荇臣が率いる保靖兵は倭寇と石塘湾で遭遇し、苦戦のすえ、敗れた倭寇は北の平望へ逃亡しようとした。さらにまた副総兵俞大猷が率いる永順宣慰司彭翼南徳の永順兵からの狙撃を受けた。倭寇はやむなく王江涇に逃げた。張経は再び俞大猷に永順兵を以ってその先を遮断し、盧鐘に保靖兵を率いて後から追撃をするように命じた。湯克寛がさらに水師を率いて中路から戦いに参加した。この戦いで、明軍は水軍、陸軍の協同作戦で勝利を得、「捕虜と斬首されたものは合せて一千九百八十人を超え、溺死した者と逃げて死んだ者は甚だ多い²⁵⁾」。残る数百人の倭寇たちは柘林に逃げ帰った。「倭患があつて以来、東南での戦鬪は勝利を得たものはなかった。これは第一の功績である²⁶⁾」といわれて、明軍の志気を大いに高めた。

絵巻の始まるところに、海上から襲来してくる倭寇船にある旗にうす

表2 嘉靖三十六年倭夷入寇年表

	惠潮	漳泉	興福	温台	寧紹	杭嘉	蘇松	常鎮	淮揚
三月			賊は福州府を侵した。						
四月					賊は定海関を侵した。		賊は營前沙を侵し、同知熊桴はこれを撃退した。		賊は海門県を攻めた。
五月									賊は揚州府を侵し、山東兵はこれを下した。参将盧鐘は湾頭で下し、賊は宝応県に入った。
六月									副使于徳昌は泗州の賊を大敗させた。千戸汪時中は揚子湾頭で賊を下し、廟湾まで追撃し、これを平定した。
十月			賊は連江県に攻め入り、官軍によって追ひ払われた。						
十一月					総督侍郎胡宗憲は賊首王直を定海関におびき寄せて、捕まえた。				

い墨のあとが残っていた。卷子が装工されたこともあつて、文字は判読できない。日本側の赤外線撮影の結果、うっすらと「日本弘治三年」と

現れた。これはすなわち嘉靖三十六年で、紀元一五五七年に当たる。一つの絵巻に異なる二つの時間が現れたのは不思議なことである。まず嘉靖三十六年における倭寇の侵入と抗倭の状況を見ておこう。

表2 「嘉靖三十六年倭夷入寇年表」⁽²⁷⁾から分かるように、嘉靖三十六年になると、明軍の防衛増強で倭寇の侵犯回数は大いに減り、六回だけであった。侵害地域も縮まり、杭州・嘉興地区はすでに平和が回復し、蘇州・松江地区にも局地的な騷擾しかなかった。これによって騷擾先は福建と江蘇の淮揚地域になった。もともと著名な事件は一月に起きた、総督侍郎胡宗憲が倭寇の首領王直を定海関におびき寄せて捕らえた事件であった。

「明人抗倭図巻」は連続漫画の形式で、異なる画面からなっている。画面の描く地域が広く、内容も豊富であり、時間的な連続性がある。これにより、画面に二つの異なる時間が現れた。推測としては二つの可能性がある。一は戦の時間と作成時間をあらかず。二は倭寇の継続時間が長いことと侵害のひどさを表す。筆者は第一を取りたい。「日本弘治一年」は描かれた事件の発生時間で、これは画面の内容にも合致している。「日本弘治三年」は作者の作成時間であろう。つまり、作者はフラッシュバック方式で、現在のわれわれが昔のことを語るように、「日本弘治三年」から「日本弘治一年」に起きた王江涇の戦いをのべようとした。作者がこの図を作成したとき、社会の暗黒と、官僚の相互闘争など、ある種の政治的な要素から、含蓄のある表現を使わざるを得なかった。これは中国の年号を使わず、日本の年号を使うことから証明できる。「日本弘治三年」という発見は絵巻の研究自身に有効であるうえ、さらに、絵巻を研究するには多くの科学技術を用いて多方面から研究することの重要性を知らせてくれた。

一通り解説をすると、疑問を禁じえなくなった。このように苦心して作成した絵巻になぜ署名をしなかったのか。これほど大勝利を称えているのに、誰のために作成したかをなぜ記さなかったのか。あきらかに、この絵巻の背後には人知れない事情が隠されていた。

王江涇の闘いは本来称えられるべき戦役であった。しかし、主な参加者はその後数年間に人生の激変を迎えた。指揮者であった総督張経は嚴嵩一派の趙文華に迎合しなかったため、戦の前に「軍人の給料を浪費し、民に災いをもたらし、賊を恐れて戦機を失った」⁽²⁸⁾と弾劾を受け、戦のあとで嚴嵩に「経は文華、宗憲が合同で殲滅した功績を全部自分のものであると騙した」⁽²⁹⁾と弾劾された。世宗はこれらの讒言を聞き入れ、張経を逮捕して入獄し、五ヶ月後に斬首した。後世の詩に「君不見王江涇頭張尚書、凱歌声里徵囚車（君は見なかったらうか。王江涇で戦った張尚書は凱歌が聞こえる中で囚人の車に入れられたのよ）」⁽³⁰⁾というのは張経の不遇を嘆いたものである。

浙江巡撫李天寵は人となりが廉直なものであった。趙文華が、彼は「酒をたしなみ、事をだめにした」⁽³¹⁾と誹謗したため、世宗は、彼にかえて胡宗憲をその職に任じた。しばらくして、御史叶恩が、李天寵は倭寇を解き放ったと弾劾した。世宗は讒言を取り入れ、李天寵を逮捕して入獄し、張経と同じ日に処刑した。

俞大猷、盧鏜、湯克寛は抗倭の名将である。数次にわたり倭寇と交戦し、浙江の倭寇の平定に欠くべからざる功績を残した。王江涇の戦いでは、俞大猷は蘇松副総兵で、永順兵を率いて倭寇の行く手を遮断した。盧鏜は参将として、保靖兵を率いて後ろから倭寇を追撃した。湯克寛は提督海防諸軍として、水路から攻撃を指揮した。この三人は王江涇の戦いの重要な参加者でありながら、企画者ではなかった。作者は戦い全体を描き出そうとし、戦術の決定者と戦略的な指揮者を宣伝しようとした。

胡宗憲は趙文華、嚴嵩親子と付き合いがある。初めは浙江巡按監察使であったが、王江涇の戦いの後、左僉都御史に拔擢された。後に総督浙直福建軍務になった。三五年に徐海が率いる倭寇をおびき寄せて降伏させ、のちに殲滅した。三九年(一五六〇年)に、海賊王直を平定した功績で太子太保の称号を与えられた。四一年(一五六二年)に、南京給事陸鳳儀によって「嚴党」と弾劾されて入獄し、五四年に獄中で病死した。『明史』は列伝「胡宗憲伝」で次のように語っている。「経の王江涇での勝利に憲宗(胡宗憲)は寄与した」⁽³²⁾。これは胡氏がこの戦いで手柄を立てたが指揮者ではないと明言しているものである。

趙文華は嘉靖朝の工部侍郎で嚴嵩の一派である。「海神をまつる」ことで倭寇に対抗するといつて、世宗に浙江へ派遣された。王江涇の戦いでは、自分と胡宗憲が「毒酒を船に載せて偽って捨てた、賊はこの酒を飲み、毒に中った」⁽³³⁾ことを強調し、一番の手柄を自分と胡宗憲に帰した。このような手柄は画面でも表現しやすい。胡宗憲と趙文華の人となりからすれば、自分のために描くなら、この手柄を表現しないことはないと思われるため、この絵巻は彼らのために書かれたものではなかったと見ている。

個人的な観点としては、この絵巻は張経のためにかかれたものと考えている。張経の部下あるいは家族がその死後、彼を偲ぶために書かせたものであろう。中国古代の絵画には最初画家の署名はなかった。宋代になつてから自分の名前を岩や樹木に隠す画家があらわれた。この絵巻の作者は時勢に制限され、公に張経の無実を訴えることができずにいた。それで、自分を保護するために、落款を隠すやり方で、旗に書き込みをすることによって戦いの時間と場所を暗喩した。画面に日本の元号が用いられたのもこのためであろう。

二、「倭寇図巻」

「倭寇図巻」、材質は絹、彩色による絵画で、縦は三一・〇cm、横は五七二・七cm。日本東京大学史料編纂所所蔵。蔵品番号・S〇〇八〇―二。文求堂書肆により中国から日本にもたらされた。題箋は「明仇十洲台湾奏凱図」。

「倭寇図巻」の画面も四つに分けられる。倭寇の襲来、民衆の避難、海上の合戦と明朝の援軍、である。

海上より遠くから倭寇を大勢載せている五隻の船が向かってきている。遠くの船で、一人の倭寇は弓を引いて、待ちきれない様子である。懸かっている旗には「日本弘治四年」とある。近くの二隻の船はすでに錨を下ろし停泊している。また飛び降りた倭寇もいる。道では、倭寇は隊をなして歩き、話し合ったり、弓に矢をつがえたりしている。岩に二人の倭寇がのぼり、一人の倭寇の肩にもう一人の倭寇が立ち、長槍を支えに形勢を眺めている。

田舎道では最初の略奪者はもう戦利品を手を帰り道についている。屋敷は燃え上がっている。一人の倭寇は刀を振り回して人を脅かし、もう一人は落とした風呂敷包みのようなものを拾っている。その先は避難していく人たちである。川向こうの坂には避難民のグループがあり、地面に座っている人も、立ってしゃべっている人もいる。釜を立てて食事を作っている人もいる。山の後ろには避難者を載せる小船がある。

海上には二隻の明軍の船と二隻の倭寇船がある。明軍のものは画面の左側にあり、倭寇船は右側にある。明軍は全力で侵攻し、どらをたたいて志気を高めようとしている。弓に矢をつがえている兵もいるほか、長い槍で倭寇を刺して水中に落としている兵もいる。船にかかる旗には「大明神捷海防天兵」、「第二哨」、「護国救民」と書かれてある。後部の

橋の下から加勢のために一隻の兵船が駆けつけている。倭寇のほうは圧倒されている様子で、水中に落ちて這い上がるうとする者、すでに溺れかかっている者がいる。橋の傍らに、「報捷」の旗を持つ騎馬武者が走っている。

明軍の行列が武装して城から出てきている。一番先を歩いている者は片手にそれぞれ剣と盾を持った兵士であり、後ろに続くのは長槍、刀、真がま、三角の旗などをもつ兵士である。さらに鎧を着けた将校に囲まれた赤い裳の主将が馬にのって行進している。行列の後ろにも旗が揺らめき、部隊は城から続けて出ている。城門には「海防新城」と書かれている。

「倭寇図巻」の元の題箋は「明仇十洲台湾奏凱図」であり、細密に描かれた青緑のカラー絵である。「仇十洲」は即ち仇英で、字は実父、号は十洲である。明代の著名な書家と画家で、江蘇太倉の人で、後に蘇州に転居した。沈周・文徵明と唐寅と並んで「呉門四家」と称された。明弘治から嘉靖年間までの人で、書画に関連する著作は大体彼の卒年を嘉靖三十一年（一五五二年）としている。³⁴人物、山水、樓閣を書く名手であり、臨模を特に得意とした。書き方は趙伯駒と南宋院体を継承した。伝世の青緑山水「桃源仙境図軸」と「倭寇図巻」とを比べると、「桃源仙境図軸」は山の高低がはっきり現れ、岩は皴法を使わず、線でスケッチをした。その上に青と緑の鉱石顔料を施してある。「倭寇図巻」の岩はスケッチのあとに「披麻皴」という手法を使っている。特に倭寇が観望にたった岩の下に、面積の大きい青を突如使って、不自然である。人物の描き方を見ると、「桃源仙境図軸」のなかの三人の文人と二人の童は細やかに表情や動きが描写されている。「倭寇図巻」の人物はやや荒っぽい描き方をされている。とくに避難している婦人の服と明軍の上着、

旗、鞍は同じ藍色である。これは描き方が細かく、謹厳であるといわれる仇英の特徴に一致しない。仇英の人物画はラインが流暢で、形が精確で、色も鮮やかなことから広く好まれた。蘇州あたりではかれの作品を臨模するのが流行っていた。このために題箋者はこの図を仇英の作とした。本館所蔵の「百美图」、「美人春戯図」と同じ類のものである。

史料編纂所側の赤外線撮影により、画面に「日本弘治四年」と「大明神捷海防天兵」の文字があるとわかった。「日本弘治四年」は嘉靖三十七年で、紀元一五五八年にあたる。ここには重要な情報が含まれている。海防に携わる明軍は、中国史を調べる限り、嘉靖期に台湾に出兵したことはない。これにより題箋と絵巻の内容は一致しない。史料編纂掛の解説では、題箋はあとからつけられたものだとし、台湾で勝利という説を否定し、絵巻を「倭寇図巻」と名づけている。³⁵

表3「嘉靖三十七年倭夷入寇年表」³⁶では嘉靖三十七年における倭寇侵入と明軍の抗倭の状況を表した。

拠点が平らげられたことにより、直隸・浙江における倭患はコントロールできた。戚繼光は抗倭の將軍として倭寇との戦いに参加した。福建省は明軍の兵力が比較的少ないため、倭寇の被害が甚だしい。

嘉靖期の倭患がひどくなった主な原因は海防の弛みであった。当時軍人の駐屯制度が破れ、衛所の人手もかなり減らされた。旧制では各衛所の軍人は五〇〇〇人であると規定してあるが、この時期には、福建の永寧衛以外の各地はどこも定員割れをしていた。浙江地区では衛所の平均軍人数は一〇四人で、わずかに定員の二二%である。³⁷船舶と器械も古くなったり老朽化したりしていた。³⁸急に必要な場合は漁船を募るしかない。兵は十分な訓練を受けていないうえ、船も専門的なものではないので、往々にして倭寇を見ただけで逃げ出すのである。画面では双方の合戦では明軍が勝利している。「護国救民」、「大明神捷海防天兵」及び

表3 嘉靖三十七年倭夷入寇年表

	惠潮	漳泉	興福	温台	寧紹	杭嘉	蘇松	常鎮	淮揚
一月	賊首の許西池が揭陽県を侵した。賊は蓬州所に入り、提都督御史王鈞が副使林懋拳などを遣わしてこれを下した。								
二月			賊は福州府を侵した。	賊は樂清県を攻めた。	賊首である毛烈は舟山岑港を拠点とした。都指揮戴冲霄は王直の残部陳秀山等を捕らえた。				
三月			賊は福寧州を侵した。巡撫都御史阮鄂が兵を粟あせてこれを撃破した。						
四月		賊は慧安県を攻めた。	賊首である嚴山老は安海城に入った。僉事盛唐などがこれを下した。賊は福清県を陥落させた。賊は興化府を攻めた。	賊は松門衛を侵した。賊は桃渚所を侵した。賊は台州府を攻め、僉事李三畏、知府譚綸はこれを打ち返し、隘頑所の海浜まで追撃し、またこれを大敗させた。賊は寧海県を攻めた。賊は仙居県を攻め、参將戚繼光がこれを平定した。賊は温州府を攻め、総督胡宗憲は参將戚繼光、張鉞を遣わしてこれを平定した。					
五月		賊は泉州府を攻めた。賊は南安県に入った。賊は崇武所を攻めた。賊は慧安県を攻めた。賊は手分けして漳、泉州府を攻めた。賊首洪澤珍が倭寇を導き入れ、旧浯嶋を拠点とし、手分けして略奪を働いた。							
六月					賊は観海衛を侵した。賊は昌国衛を侵した。				
八月					官兵が舟山にある賊の拠点を攻め、すべて平定した。				
十月	賊は漳州より饒平へ入り、黄冈民鎮に入り、ここに拠点を置いた。僉事経彦宗はこれを撃破した。								

「海防新城」は共に明軍の海防能力の増強を示している。これは張経が総督になってやむなく客兵を徴発した、王江涇の戦いがあった時期と事情が違ふようだ。明軍の「神捷天兵」で最も名高いのは後世によく知られる「戚家軍」であった。嘉靖三五（一五五六）年に、戚継光は参将として山東から浙江へ転下し、寧波、紹興、台州の三府の守備を担当した。彼は現地の軍隊に悪い習慣が氾濫したのに気づき、揭示をして兵を募り、別途、義烏の農民と鉞山労働者からなる新軍を立ち上げた。厳しい訓練を経て、この部隊は台州で一三戦全勝の記録を作り、その後倭寇がその名前を聞いたただけでおののく「戚家軍」に成長した。これは図巻にある「日本弘治四年」という時間と合致している。絵の内容だけを見ると、王江涇の戦いより遅い時期であると分かる。作成時間は明末清初で、明軍の海防力が強くなって以降であろう。

三、「明人抗倭図巻」と「倭寇図巻」の関連

画面の描写から、二者の間に近い内容が多いことがわかった。異なる作者によるこの二つの作品は、マクロ的にみれば画面の構成（共に四つの部分からなり、前の三つの部分は倭寇の侵入と人々の避難と正面からの合戦を描く）から、小さい画面の細部描写（形勢の観望、略奪と放火、二グループの避難者、双方の合戦に出た船の数、合戦の方式）まで、ミクロ的にみれば、日本の元号を使っていること、書かれた場所などは非常に似ている。これは二者の間に伝承関係があることを物語っている。個人的な観点として、「明人抗倭図巻」は時期的に早く、「倭寇図巻」はそのあとにできたものと考えている。

まず、「明人抗倭図巻」は写実性が強い。

1、画家は倭寇の姿を正しく描いている。裸足、単、日本刀を下げている、月代という髪型などがそうである。この形は男子の額

から頭部中央までの髪の毛を半月型にそり上げた、侍特有のスタイルである。

2、画家は倭寇の戦術と行動を画面に巧妙で自然に書き込んでいる。第一部分では、倭寇が普段使う戦術でその侵入を表現した。倭寇が奥地に略奪に行く場合は大体組織的で、計画を持っている。鄭若曾はこれをまとめて記録している。

鄭若曾は『日本図纂』で下記のように書いた。「賊は毎日鷄鳴より起きて、地面に座って会食をする。食事が済むと、首領が高座して、皆はその命令を聞く。冊子を見ながら本日の略奪先、頭目になるもの、グループの構成……」⁽³⁹⁾。絵巻の最初にあるのは、停泊した船の舳先に倭寇のグループが集まり、略奪の前に略奪先などを説明している状況である。扇子を持つのは首領で、ほかのものは合掌して命令を聞く姿である。鄭若曾がまとめた、また倭寇がよく使う「蝴蝶陣」、「長蛇陣」も画面に出ている。

「蝴蝶陣」は明軍と正面から闘うときの戦術で、強い殺傷力をもつ。「戦になると、一人が扇子を振るえば、みなは刀を振り回し、空に向かって切りつける」。倭寇は「大体双刀を使うのに慣れてる」。倭寇の群れが刀を振り回すと、相手は往々にして「あわててこれを仰ぎ」、そこで倭寇は「上で騙し、下を掠める」、「下を切りつける」⁽⁴⁰⁾。絵巻では倭寇の侵入を描き、陸地での交戦を描いておらず、直接「蝴蝶陣」を表現していない。しかし、画面に扇子を振るう首領と両手に刀をもってふり回す倭寇がいることから、明軍に出会った場合、首領の手にある扇子が振り回されるのは、倭寇が「蝴蝶陣」を用いて侵攻する信号であると想像に難くない。

「長蛇陣」は倭寇が行進中に使う戦術である。鄭若曾は下記のとおり説明している。⁽⁴¹⁾前に百脚旗で先導され、行列を作って行進していく。最

も強いのは先鋒で、最も強いのはしんがりとなり、間には勇ましい者と卑怯な者が入り混じる」、「その行列は単列で長い」、「陣をつくれれば必ず四分五裂する」。絵巻にある倭寇はほとんど二、三人でグループになり、間の間隔は長い。これはまさに「長蛇陣」そのものであり、歴史的な記述とあっている。

絵巻の第二部分では、倭寇の略奪と現地の住民にもたらした損害が表現されている。記録によると、倭寇の至る所、家屋を焼き払い、婦女と家財を略奪する⁽⁴²⁾。これによって、「呉越の村落と町における豊かな家の半分は廢墟となった⁽⁴³⁾」。官吏と平民が殺され、溝に埋められたものは数十万にのぼる⁽⁴⁴⁾。画家は倭寇の行動と人々の遭難という二方面から現している。遭難者は三つのグループに分けられる。船に乗って逃げる人たちは、文人の恰好をしている者もあり、使用人を連れてくる者もあり、シルクを身につけている女性もいる。豊かな家の者であると思われる。もう一グループは群れをなした、綿布を着ている百姓である。肩に大きな風呂敷包みを担いでいる女性が重さで背を曲げている。しかし、残りの家財を手放そうとしない。男性が担いでいる天秤棒の片方は幼い子供で、片方はビンなどの生活用品である。最後を歩く夫婦のうち、男性は赤ちゃんをかかえて、振り返って妻を急かしている。妻は産後の弱さからであろう、歩きかたがよろよろしている。もう一グループは坂で休んでいる避難者である。男性たちは穴を掘り、釜を立ててご飯を炊いて至り、地面に座って食べていたり、話し合ったりしている。女性は一ヶ所に集まり、子供をあやし、着るものを片付けたり、地面に座って休んだりしている。赤い服の者は顔を覆いながら泣いている。年寄りの婦人が合掌して黙々と祈っている。これは人々が故郷を離れて、行く先を失った模様を描いたものである。同時に、屋敷を焼き払うという倭寇の典型的な行動とその罪を表現している。『倭変事略』には「三十四年、賊は

石寇鎮を侵犯し、三日にわたって放火し、死者は数え切れぬ⁽⁴⁵⁾」という記述がある。鄭若曾は次のようにまとめている。「強奪が終わろうとしたところで、放火をし、炎と煙が天に届きそう、人々はその残酷さを恐れ、賊はそこを離れる⁽⁴⁶⁾」。放火は倭寇の略奪プログラムの最後の手順で、住民を恐ろしがるのに有効である。ここからも画家が細部描写の材料選びに工夫していることが分かる。

3、画面の細部は正しく、実情に合っている。
水

画家は海水、湖水と川水を三種の描き方で表現した。一種は倭寇船の進入の海面である。海水の起伏が大きな曲線になり、あたかも波が立っているように、岸に近いところでは岩をたたいて波しぶきも描かれている。もう一種は双方が交戦する湖面である。水面が広々として、周りには山に囲まれ、鱗のような光を反射している。湖の上では船の行き来があり、船の底から水しぶきが出されている。更にもう一種は人々が船に乗って避難するときと捕虜を護送するときに通過する川の水面である。後者の水面では太鼓橋によって湖とつながっている。この川は最終的に城に流れる。水面も鱗のような波紋が出ているが、サイズがより小さく、静かに流れているようだ。

兵器

倭寇の兵器は主に日本刀と大弓である。画面には数回にわたって刀を振り回す倭寇と弓を引く様子を描いている。

日本刀は刀身が狭く、刃が鋭い。明軍と闘うときには「一振りすれば、十数本のやりが同時に切断される⁽⁴⁷⁾」という。刀に慣れた倭寇は闘うとき、「手に双刀を舞わせ、刀は五尺余と長く、腕が動いて切っ先がはなはだ長い。その刀が舞っているとき、刀身は雪のようで、打つすぎがない⁽⁴⁸⁾」。大弓は「長さは七、八尺で、矢の長さは四、五尺ある。鏃の鉄は燕の

尾のごとし。鏃の竹は長槍のようであり、川向こうから城を狙って射ると、城内の屋敷にあたり、鏃はかわらと杭を貫いた⁽⁴⁹⁾。

明軍の兵器には伝統的な刀、槍、斧、真ガマのほか、当時の典型的な武器もある。たとえば「天蓬鏢」、「鏡鉞」がそれである。

天蓬鏢・「形は月牙のごとし、内側も外側も刃になっている。横幅は二尺、柄の長さは八、九尺、或は一丈ある。陸軍の騎馬または歩兵戦における第一の利器なり⁽⁵⁰⁾」。この武器をまっすぐに使えば相手の手を切れ、上にむいて使えば首を取れる。下に使ったときには足を傷つけられ、非常に役立つ武器である。「明人抗倭図巻」の海上合戦では明軍の船にこの武器が置いてあるのはまことに面白い。本館所蔵の「王瓊事跡図冊」のなかにはこのような兵器が描かれている。

鏡鉞・「この兵器は倭寇の騷擾以来使われる。閩、粵、川、貴、雲、湖ではみな古くからあり、ただ作り方が違う。兵器の中ではもつとも鋭いものである」。このような武器は攻めにも守りにも使える。遠くからは火矢をつけて倭寇に当って発射し、近くからは刺すことができる「万全万勝の武器」といえよう。

これだけでなく、明軍の船には火器もある。一つは舳先につけた火砲(銃)で、もう一種はまるいボールのような「火妖」に似たものである。

記録によると、明代は洪武年間から軍器局、兵仗局、安民廠、内官監など、中央から直轄される各種火器を製造する機関が設立された。大量に「大將軍炮」、神銃、手把鉄銃、手把銅銃、碗口銃など、異なる種類の火器を作った。明代の制度によると、百戸に銃手を一〇名、刀牌手二〇名、弓箭手三〇名、炮手四〇名をつけなければならない。明代のころにはすでに「京軍は十万、火器手はその六割」という比重を占めている。倭寇との戦いの中で、多くのフランキー発射銃や、スピードと回転が速いサソリ船も使われた。「明人抗倭図巻」の作者が戦を経験した者

でなければ、これほど写実的なものは描けなかつたろう。

船

船には海の船と川の船に分けられる。異なる船の構造は区別が大きい。海の船はおもに帆を動力源とし、櫂は補助的な道具である。小型の川の船は大体櫓と棹しか使わない。「明人抗倭図巻」にある、海上を走る倭寇船には帆があり、櫂も使われる。庶民を搭載する船と捕虜を護送する船は川を走るから、道具は櫓と棹であり、川の船である。しかし「倭寇図巻」には櫓をこぐことで進む船が描かれている。櫓は、漢代から広く使われた、中国の発明のなかでももつとも科学的な成果物で、縦に漕ぐ推進器具である。船を進めるほかに、船の方向転換と方向調整にも使える。構造が簡単で、多機能を持つ。ただし人力で小さい角度から水中で漕ぐ方式なので、海の船ではほとんど効果がない。まして海を渡ってくる倭寇船に現れることは不可能であろう。これは作者が江南周辺の生活で見たものを想像で書き入れたという可能性が高い。「明人抗倭図巻」の波がたつ広い海に、倭寇を満載した船がつらなってくる場面と比べると、「倭寇図巻」にある倭寇が海上から襲来してくる描写はさらに荒っぽく、数隻の船しかない。これは「諸倭が大挙して侵入し、戦艦が数百つらなり、海を覆う勢いできた」情勢とかけ離れている。作者の構成員と画面のイメージの差が目につく。このような具体的な差がでるのは、作者の生活する時代の差によるものであろう。

次に「明人抗倭図巻」はモチーフが強調され、創作の意図がはっきりしており、構図が緻密で全体感が強い。

「明人抗倭図巻」のモチーフは、王江涇の戦いの勝利を称えることによつて、その指揮者を褒め称えることである。絵巻は連続の漫画のように、内容は変化に富んでいる。最初は広い海とサイズの異なる倭寇船、そして船にいながら刀を振り回す倭寇によつて、倭寇のたけり狂う様子

を表した。つづいて屋敷を破壊され、家財を略奪され、故郷を離れて流浪の身とならざるをえない人々によって、倭寇の侵入が社会にもたらした危害を表現し、倭寇との戦いは非常に差し迫っていることを表現した。そこで明軍と倭寇の正面からの戦いが始まり、山の合間ではためく旗には「設伏猛烈天兵」、「火照奇兵右伏」、「威武天捷天兵」、「靖」と書き込み、明軍の勢いを浮かび上がらせ、客軍との協同作戦であることと、敵を包囲し、追撃する戦術を強調した。海上における合戦をおして海陸合同作戦であることを表現した。以上をもつて、この戦いは計画が綿密で、戦術に関する思想がたざしいと物語っている。戦いは勝利し、捕虜を護送して帰還してくる軍隊を、指揮者が城から出て迎える場面で終わっている。

また、交戦の方向が「倭寇図巻」と違う。「倭寇図巻」では、双方の船首の向きとそれぞれの進攻・防御の方向は一致している。すなわち倭寇は海上からきて、手前に向き、攻める状態になっている。明軍の船先は海に向かい、防御の態勢になっている。「明人抗倭図巻」では、倭寇の船は海に向け、明軍の船首は城に向かっている。これは倭寇の敗退と、明軍がその逃げ道を遮断している状況を表している。

それから、第四部分も異なる。「明人抗倭図巻」では出迎えと捕虜の献上を強調している。「倭寇図巻」では出征の場面になっている。兵士たちは統一された軍服を身に着けて、行列をととのえ、騎馬の将校も鎧をつけている。これは抗倭の兵力の増強を示し、海防の増強を示している。これらの違いは作者の考えの異なる面を示すうえに、図巻の作成時間を推定するために決定的な役割を果たしている。

第三に、絵巻の風格は時代的な特性を備えている。

「明人抗倭図巻」の画面の背景は山水画のようで、人の目を引く。海上にある距離とサイズが異なる船が帆をかけて進んでいる。陸には柳が

つらなり、畦が整然としている。鳥、屋敷、流れている川に船が動き、水鳥が羽ばたいている。農村の景色が現されている。その前方は広い湖で、遠くには山がつながっている。赤い城と五層の木塔がある。近くには村があり、春節につけた聯がまだ赤い色をしている。それから水が二手にわかれ、狭いところに太鼓橋がかかっている。最後は松と巨大な岩城壁である。

画面全体は描き方が細やかで、色使いも雅である。画風は明らかに文徵明（一四七〇—一五五九年）の影響を受けている。嘉靖期は、中国絵画は「院画」が衰え、「浙派」も末路をたどり、「呉門画派」が日増しに主流となりつつある時期である。文徵明に代表される文人画家は、山水の描き方を趙孟頫と「元四家」王蒙と黄公望に学び、景色のトーンがおだやかで、筆触が清らかで、感情を表し、読書人の風格をもつ文人画風を形成していた。この流派は当時において名高く、その作を求める人も多く、これについて習う人も多い。各地で文徵明の画風を習う人が極めて多い。文徵明自身も書画創作の頂点にいた時期にこの絵巻が作成されたのであろう。絵巻のスタイルは時代的な特色を持っている。

ここから見ると、「明人抗倭図巻」は作成時間が戦から程遠くなく、写実的な歴史絵画である。

現今では、撮影技術が普及し、書画は印刷されることから、われわれは有名人の書画を大量に閲覧できる。しかし、「明人抗倭図巻」が作成された時期には、書画は皇室あるいは個人の所蔵品であった。原画を見ることができても、代表的な場面しか記憶できない。記憶をもとに、自分の考えを入れて改めて作成せざるを得ない。可能性として、「倭寇図巻」の作者は「明人抗倭図巻」を見てから、自分の倭寇に対する認識によって「倭寇図巻」を製作した。それで、「倭寇図巻」と「明人抗倭図巻」のような、一見似ているように見えて、細かく見ると異なる点

が多いということになったのであろう。本館所蔵の「明人清明上河図巻」もこのケースである。

おわりに

総じて言えば、「明人抗倭図巻」は同時代に作成された、写実的な絵画であり、王江涇の戦いを忠実に記録したものである。これに対して、「倭寇図巻」は明末あるいは清初の人が「明人抗倭図巻」を臨模したもので、明代における倭寇に対する戦いが勝利を収めた後の、海防の増強に関する、作者の認識を表している。倭寇に対する闘争は、二百年余りにわたる一大重大事件である。しかし史籍・地方史・小説には記載が見られるが、画像で記録されたものはいへん珍しい。この意味で「明人抗倭図巻」と「倭寇図巻」の存在は大変高い歴史的価値を有している。

〔註〕

- (1) 『日本図纂』によると、倭の好みは生糸、真綿、布、綿、赤い糸、水銀、針、鉄の鎖、磁器、古銭、古名画、古名書、古書、葉、毛氈、馬の背にかけるフェルト、白粉、小さい籠、漆器、酢である。中華全国図書館文献縮微複製中心『日本史料彙編』一六一―一六四頁。
- (2) 『明史』卷九一「兵志」。
- (3) 朱統(一四九四―一五五〇)字は子純、号は秋崖で、長洲(今の呉県)の人。正徳一六年(一五二一年)の進士であった。知府、南京刑部員外郎、四川兵備前使、広東布政使を歴任。嘉靖三五年、右副都御史に拔擢され、翌年に提督閩浙海防軍務に任命された。
- (4) 『明史』卷二〇五「朱統伝」。
- (5) 『明史』卷二〇五「朱統伝」。
- (6) 『明史』卷三三二「日本伝」。
- (7) 王忬(一五〇七―一五六〇)字は民応、号は思質で、江蘇太倉の人。嘉靖二〇年(一五四一)の進士であった。

- (8) 『明世宗実録』卷三九六。
- (9) 『明史』卷二〇四「王忬伝」。
- (10) 張経(一四九二―一五五五年)、字は廷彝、号は半洲で、侯官県(今の福州市)洪塘郷の人。明正徳十二年(一五一七年)の進士で、著作に『半洲詩集』がある。
- (11) 『明世宗実録』卷四一〇。
- (12) 『明世宗実録』卷四一〇。
- (13) 『明世宗実録』卷四一〇。
- (14) 鄭若曾(一五〇三―一五七〇)、昆山の人で、字は伯魯である。天文、地理、地図、軍事に精通する。胡宗憲の幕僚として倭寇との戦いに謀略をふるった。倭寇の平定に貢献したため、朝廷から錦衣を授けられたが、受けなかった。
- (15) 鄭若曾『籌海図編』、卷之八上「嘉靖以来倭夷入寇総編年表」五一七―五二九頁、中華書局、二〇〇七年。
- (16) 馮賢亮『明清江南地区環境變動与社会控制』二八九、二九八頁、上海人民出版社、二〇〇二年。
- (17) 『明世宗実録』卷四一八。
- (18) 『明世宗実録』卷四一八。
- (19) 「永順州軍民宣慰使司」条。
- (20) 『明史』卷三一〇「保靖州軍民宣慰使司」条。
- (21) 『明史』卷二〇五「張経伝」。
- (22) 『明史』卷三一八。
- (23) 『明史紀事本末』卷五五「沿海倭乱」。
- (24) 鄭若曾『籌海図編』、卷之八下「倭寇分合始末図譜」五八一―五八二頁、中華書局、二〇〇七年。
- (25) 『嘉靖東南平倭通録』。
- (26) 『明世宗実録』卷四二三。
- (27) 鄭若曾『籌海図編』、卷之八上「嘉靖以来倭夷入寇総編年表」五四〇―五四二頁、中華書局、二〇〇七年。
- (28) 趙文華『嘉靖平倭祇役紀略』卷一。

- (29) 『明史』卷二〇五「張經伝」。
- (30) 沈家澗「敵家兵詩」。陳懋恒『明代倭寇考略』四〇頁、人民出版社、一九五七年からの孫引きである。
- (31) 『明史』卷二〇五「李天寵伝」。
- (32) 『明史』卷二〇五「胡宗憲伝」。
- (33) 趙文華『王江涇捷報』。
- (34) 揚仁愷主編『中国書画』四三五頁、上海古籍出版社、一九九〇年版。
- (35) 『〈大正十二年五月四、五、六、七日開催〉第十一回史料展覽會列品目録』東京帝国大学文学部史料編纂掛。
- (36) 鄭若曾『籌海図編』、卷之八上「嘉靖以来倭夷入寇総編年表」五四二—五四八頁、中華書局、二〇〇七年。
- (37) 陳懋恒『明代倭寇考略』三六頁、人民出版社、一九五七年。
- (38) 陳懋恒『明代倭寇考略』三六頁、人民出版社、一九五七年。
- (39) 鄭若曾『日本図纂』。
- (40) 鄭若曾『日本図纂』「倭術」。
- (41) 鄭若曾『日本図纂』「倭術」。
- (42) 範表「海寇議前」、『玄覽堂叢書統集』所収。李光壁『明代御倭戦争』四三頁からの孫引きである。
- (43) 『罪惟録』卷三六「日本伝」。李光壁『明代御倭戦争』四三頁からの孫引きである。
- (44) 範表「海寇議前」、『玄覽堂叢書統集』所収。李光壁『明代御倭戦争』四三頁からの孫引きである。
- (45) 『倭変事略』。
- (46) 鄭若曾『日本図纂』「倭術」。
- (47) 『倭変事略』。
- (48) 『上海県志』卷十一。
- (49) 鄭若曾『籌海図編』卷十三下、九五七頁。
- (50) 鄭若曾『籌海図編』卷十三下、九五〇頁。
- (51) 『中国軍事史』第三卷『兵制』四〇三頁からの孫引きである。

(翻訳：黄栄光)